

# 濱 田 政 二 郎

は ま だ ま さ じ ろ う

学 位 の 種 類      文      学      博      士

学 位 記 番 号      文      第      1 9      号

学位授与年月日      昭和 4 7 年    1 月 1 3 日

学位授与の要件      学位規則第 5 条第 2 項該当

学位論文題目      アメリカのユートピア文学  
                            —アメリカにおける理想郷探求の諸相と  
                            その文学への反映—

論文審査委員      (主査)  
                            教授 加 藤              孝              教授 柴 田 治三郎  
  教授 安 井              稔

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 序

個人または集団としての人間の意識や態度の、現存の秩序の安定化の方向にずれているものが、イデオロギー的であるに対し、現存の秩序を変改、あるいは破壊するよう志向するものは、ユートピア的である、と社会学者Karl Mannheimは言う。この発言はユートピア的な実践、または文学を考える場合、重要であろう。なぜなら、ユートピア思想は常に、自負心の強い現実主義者のものではなくて、革新的な夢想家のものであるからである。

一般的に、ユートピア思想は現状を批判し、それを否定的な比較の対象とすることによって成り立つ。アメリカの歴史とユートピア思想の結びつきは、ルネサンス時代に海外発展の機運が高まり、ヨーロッパの現状にあきたらぬ人々に、アメリカを自由と平等の楽土と思わせたころに始まる。Sir Thomas Moreの*Utopia*(1515~6)とFrancis Baconの*The New Atlantis*(1627)が、新大陸へのあこがれをかき立てるに役立った。植民地時代は言うまでもなく、そ

の後も、アメリカまたはその特定の地域を、ユートピアとみなす時期はかなり長く続いた。十九世紀の中西部、西部への進出も、その現象が尾をひいたものと考えられよう。

次に目につくのは、1840年代とその前後の、集中的なユートピア思想の爆発で、宗教的なもの、社会改良主義に基づくもの、空想的でロマンティックなものなど、多彩である。<sup>\*</sup>この時期に、特筆すべきユートピア作品がいくつか生まれている。最後に世紀末になって、ユートピアを建設しようとの行動性は影をひそめたが、ユートピア文学がブームを巻き起こした。もっとも現在、記憶されているのは、Bellamy と Howells のものぐらいで、いずれも将来に理想社会の出現を期待していた。だが、なかには Donnelly のような、約百十年後に欧米文化の大破滅を予言する逆ユートピアの作品もまじっていた。二十世紀にはいって、アメリカは自国の強大と富裕と、科学の優秀を誇るあまり、イデオロギー的な保守性をもつようになり、理想の生活を描く白昼夢は喪失したかにみえる。

## 1. 宗 教 編

### (1) Pilgrims and Puritans

初期に北部沿岸に着いた植民については、宗教的動機は顕著であった。イギリス本国で果されない神の国づくりが、彼らの来航の唯一の目的であった。まず、イギリスの国教に反対した separatists が信仰の自由にあこがれて、1620年に Massachusetts 州の Plymouth に上陸した。これが後世、Pilgrim Fathers と呼ばれる人たちである。彼らの上陸の歴史的瞬間は Plymouth 植民地の二代目の総督の William Bradford によって書き残されており、Mayflower 号の故国への帰航を見送る人々の複雑な心境や、植民中の若者 Alden と少女 Priscilla との悲恋と、結婚までの経緯とは、十九世紀の詩人 Longfellow によって、まざまざと叙述されている。

続いて1630年に、Charles I の圧迫に耐えかねた Puritans が大挙して来住、Massachusetts Bay Colony を打ち立て、後の Boston 建設の基礎を築いた。彼らは Pilgrims とは違って、信仰の根拠を改革派の Calvin の純福音的な神学思想に置いていた。総督の John Winthrop のもとに、彼らは神の主権への絶対服従を誓い、原罪説と予定説を唱えた。1642年ごろの峻厳な福音の都 Boston を知るには、Hawthorne の *The Scarlet Letter* をひもとくがよい。夫がありながら自由恋愛で私生児を生んだ若く美しい Hester Prynne は、Puritanism の支配する暗く陰しい社会では、この上もなく面妖な、消化しがたい異物であった。やがて、新大陸の指導精神として大いに貢献した Puritan の神政統治も、次第に勢力の衰えを見せ、十八世紀半ばごろまでに市民から見離された。現代にもなお、Puritan の末裔がいくらか残っているが、彼らが近代

---

\* 1840年代およびその前後のユートピアの文学と運動については、随時、巻末に添付の表を参照されたい。

の物質文化のなかでいかに苦悩するかを、哲学者George Santayanaは小説*The Last Puritan* (1936)に書き現わしている。

## (2) Quakers

“Inner Light”を信ずるQuakerにはPuritanの信仰と相容れない点多く、Longfellowが“The New England Tragedies”に書き、Hawthorneが“The Gentle Boy”に書いているように、Puritanから常に激しい迫害を受けた。しかし、中部Pennsylvaniaに広大な土地を与えられてから、その勢力は急速に伸び、Philadelphiaは新世界文化の中心となり、1700年から40年までは、彼らの黄金時代であった。Quaker文学には、靈感第一主義と社会改革の実行力とを併せもつJohn Woolmanの貴重な日記があるが、前述の*The Last Puritan*に匹敵するものとして、今世紀の混沌の世相のなかに“Inner Light”を求めつつさまよい挫折する銀行家を主人公とする、Theodore Dreiserの晩年の作*The Bulwark* (1946)を見落してはならない。

## (3) Mormons

十九世紀初頭に起った純アメリカ的なMormonの教派は、圧迫と迫害と戦いながら、Illinois州に美しい神の都Nauvooを建てた。しかし彼らがcelestial marriageと呼ぶ一夫多妻主義が猛烈な反感と非難を呼び起こし、1846年2万人の“saints”はBrigham Youngの指揮のもとに、Nauvooを出てはるか西部のUtahに彼らのユートピアを求めて、大陸横断の大移動を始めた。彼自身もMormon教徒であるVardis Fisherが、彼らの感動的で雄大なexodusの経過を、*Children of God* (1939)と題する叙事詩的作品に見事に結実せしめている。

## 2. 農 業 編

初期に南部とくにVirginiaに來航した植民の第一の目的は、新しい農地を獲得することにあった。さらに、Marylandについては、George Alsopが豊かな天然資源の「地上樂園」だと書きしるし、North Carolinaについては、William Byrdが作物の豊富と暖い日光とのなまけ者の天国だと述べている。最初に、この大陸での偉大な事業は農業である、と声明し、農本主義で発展する道が西方に開かれていることを指摘したのは、Benjamin Franklinであった。南部、中部の農業経済は十八世紀に最盛期を迎えたが、その当時の農場経営の楽天的ムードをしのはめるのは、New York州のフランス移民Crèvecoeurの書いた*Letters from an American Farmer* (1782)である。

しかし、独立戦争の戦禍によって、彼はみじめな幻滅を味わわねばならなかった。南北戦争の結果は、南部plantationに決定的な打撃を与えたが、1862年に制定されたHomestead Actによって、一家の長であって、5年間一定の土地を開拓し耕作した者へは、ひとりあたり160エーカーの土地が無償で与えられることとなり、中西部、西部への開発は急速に進んだ。Ole Edvart

Rölvaagの小説*Giants in the Earth*（英訳本1927）には、そのころのSouth Dakotaにおける荒野のノルウェイ移民の目ざましい奮闘ぶりが描かれている。また、Willa Catherはスウェーデン系、ボヘミア系移民のNebraska農場での活躍と成功とを、*O Pioneers! My Ántonia*と題する初期の二つの作品に取りあげた。しかし、フロンティアの農地開発は行きづまりとなり、農業ユートピアは終結し、Hamlin Garlandの作品群が伝えているような、また、二十世紀になってFrank NorrisやJohn Steinbeckが書いているような、奴隷化した無限地獄の流浪農民の悲惨な姿が大きく写し出されてくる。Jean Canuの言葉をかりて言えば、幸福と好機を与える西部は死んだのである。

### 3. 社会改良編

アメリカのユートピア思想の盛衰を示すグラフで、おそらく最高のピークとなっているのは、1840年代であろう。宗教ではPuritanismに代ってUnitarianismが強い影響力をもち、哲学ではKantやCarlyleの感化を受けたTranscendentalismが知性人の心を奪っていた時代である。そこへ空想社会主義者のイギリスのRobert OwenとフランスのFourierらの思想がはいって、理想共同生活体のプランを有識者の頭脳に植えつけた。かくて各地に、多少とも宗教味をふくみ農耕をいとなむユートピア的集落が続出したが、なかでもとくに目立ったのはBrook Farmであった。それはUnitarian派の牧師だったGeorge RipleyがBoston近郊で試みた実験で、Emersonは懐疑的で参加しなかったが、Hawthorneは有頂天になってとびこんで行った。だが、屋外労働の激しさについてゆけず、半年でそこを出た。当時の体験を下敷きにして、約十年後に、長編小説*The Blithedale Romance*を書いた。BlithedaleとはSamuel JohnsonのいうHappy Valleyを意味し、この理想農園を訪れる4人の典型的な人物が、それぞれユートピアへの不適格性を暴露することを書いていて、本書は人間不信と理想喪失を誣い上げた、多分に悲観的な作品となっている。なお、同農園での日常生活が、農園に在住していた若い女性Marianne Dwightの手紙によってリアルに表現されているが、ここにも、Ripley夫妻への風あたりのきつさがちらついている。Brook Farmはたった6年で解散したが、煩雑な都会を離れて自然と親しみ、農耕の合間に知的会話や芸術的活動をさしはさんで、「できるかぎり同一人において、思索家と勤労者とを合致せしめる」との実験の趣旨は、知識階級のうちに共感を呼び、しばしば訪問する者、またはこの計画を模倣する者が少なからずあった。

やはりBostonの郊外にFruitlandsを創始したAmos Bronson Alcottもその一人であった。教育の改革者、菜食主義者、理想楽園の夢想家であった彼は、むしろBrook Farmに対抗する意気込みで始めたが、気まぐれで、独裁的で、経済観念に乏しく、統率の力を欠いていた。激しい労働と克己の生活に追従しかねて、仲間は一入また一入と脱落していき、彼の傍には妻と4

人の娘しか残らなかった。Fruitlandsの夢こそあっけなく破れたが、互いに助け合う明るい家庭は、生涯を通じて彼のユートピアであって *Little Women* で次女 Louisa の名声が上がることも、彼の晩年は多幸であった。Fruitlands が没落してから一カ年半後、Thoreau はWalden で孤高の生活にはいった。これは社会への protest であり、彼自身実質的な社会改革のヴィジョンをもっていたが、単独の試みなので、当時のユートピア実験の一環とみなすことはむずかしいのではあるまいか。

#### 4. 空 想 編

同じ1840年代に、実際運動にはたずさわらず、ユートピアを空想に描く作家がいくたりいた。彼らは多少ともロマンティックである点で共通している。Unitarian の Sylvester Judd が、New England の森林地帯に夢想した理想の町の状態は、創世紀の聖句に似せて “God saw that every thing he had made was very good ” と謳歌されていて、あまりにも良い事づくめの不安がある。また、Poe の美意識の極致を示すいくつかの landscape garden の描写は、地上楽園のあり方を示唆しているが、出てくる人間をも庭園装飾の一つと見る行き過ぎがあり、自然な楽しい人間同志の対話は、死後でなければ実現できないことに不満を感じる。

その点、Melville の *Typee* と J.F. Cooper の *The Crater* とは読みごたえがある。これらの海洋ユートピア小説は、十九世紀前半の未知の大洋での冒険にあこがれる風潮から生まれたものである。前者は明らかに、Melville 自身が体験した Polynesia の食人種の住む島での生活が素材となっているので、ここで扱うのは無理なようだが、空想をそそる作品であり、作者の豊かな想像力による紛飾も見のがせない。後者は架空の物語だが、Cooper 自身の海洋知識と、当時彼が大農園主として悩んでいた土地所有権や小作人対策と、彼を中傷する新聞と十年間続けてきた激しい論争とを想起せしめるものがある。原始社会を扱った *Typee* には、“noble savage” 思想による白人文化の批判がうかがわれ、*The Crater* の火山島開発の物語は、建国当初の謙虚な気持を失った当時のアメリカへの鋭い風刺がきいている。両者は、アメリカの現状にあきたらず、過去の原点に立ち帰ろうとする姿勢において一致している。異なるところは、Melville のユートピアを見る目がおおむね「横から」であり、その生活になじめない「客として」、懐疑的な「outsider として」であったに対して、Cooper のは「上から」であり、「主人として」「指導者として」、いや、「独裁者として」であったことにある。

#### 5. 未 来 編

急速な資本主義の発達と、産業革命による社会不安とが、1890年前後におびたしいユートピア作品を呼び起こした。その代表的なのは Edward Bellamy の *Looking Backward 2000* —

1887とWilliam Dean Howellsの*A Traveler from Altruria*である。二十世紀最後の年の理想化されたBostonという未来から、未開低調な目前のBostonを回顧する形をとっているのが*Looking Backward*であり、将来アメリカがりっぱに発展すると、こうなるだろうと思われる空想の国と、十九世紀末のアメリカとの交流を設定するのが、Altruria国の物語である。Bellamyは労資の対立抗争に強い関心を示し、次第に社会主義に傾倒して行った。法律を学んだが、journalismの世界にはいり、政界へ乗り出してNationalist Partyを結成した。

*Looking Backward*に描かれている未来のBostonは、国家が市民の利益を代表する強力な唯一の資本家となっていて、強者が弱者のために働く義務に負うsolidarityの共同体である。この福祉国家では、45歳を越えると生活は国家によって保障され、自由な勉学や娯楽に余生を送る。金銭がないので、銀行というものがない。各自が力の及ぶかぎり最高のserviceをしておれば、credit cardによって生活必需品の分配を受ける。巻末において、輝かしい未来を確信する著者はこう叫んでいる。“...the Golden Age lies before us and not behind us, and is not far away.”

Howellsは数多いBellamyの継承者のうちの一人である。彼は独学で教養を積み、植字工から探訪記者、編集長となった。文壇の大御所としてGarland, Crane, Norrisらを斯界へ紹介した。晩年にはTolstoyの感化を受け、キリスト教的な無政府主義思想に染まって行った。彼の考えでは、Altruria国においては、自由、平等、博愛の精神が浸透し、労働組合というものがなく、すべての人は全体の利益のために働く。働かない者は食べられないのである。Altruriaからの来訪者Homosは、Altruriaの理想国への変貌は金銭の使用を廃止したときに起ったという。Howellsが読者に訴えたかったのは、アメリカ人のAltruriaへの大挙移住ではなく、現在のアメリカはあらゆる点で未完成であるが、努力して聖書の教訓に従って改善を重ねていけば、やがてAltruriaのような理想国になる可能性がある、ということである。難破してAltruria国の海岸に流れついたアメリカの大富豪一家の戸惑いは、Altruria的な社会に容易にとけこまない現在のアメリカ人を皮肉ったものと受取れる。

そのころIgnatius Donnellyの書いた*Caesar's Column: A Story of the Twentieth Century*が異彩を放った。世紀末の作品の多くが、未来について楽天的であるのに対し、これは1988年に起こる欧米文明の破滅を予言している。彼はMinnesota州に理想部落が計画されたとき、財産を投じてその“saint”の一人となったほどのUtopianで、法律家として立ち、国会議員となって活躍した折も、思いきった社会改革案を胸に抱いていた。そうした彼の進歩的な政治家としての抱負が、この書物のなかでも、盛んに論議されているのに気づくだろう。最後に、資本家たちを血まつりにして勝ち誇った労働者たちと解放された囚人たちは、飢えと怒りの暴徒と化し、New Yorkは大混乱の巷となった。今はもうこれまでと、Gabriel夫妻と一族

友人は猛火に包まれたビルの屋上から飛行船で脱出し、アフリカの郷里 Uganda へ向かう。この秘境に、各市民が国家から教育、医療、娯楽、実業指導などを受ける民主的社会主義の新世界が誕生するところで終わっている。

未来のユートピアを語るとき、伝統の天国のイメージを避けて通るわけにはいかない。人間にとって最大究極の幸福は天国にある。地上楽園の構想はこれを模したものに他ならない。その意味で天国はすべてのユートピア観の源泉と言える。1868年に *The Gates Ajar* という本が出版され、古来の天国を紹介し、南北戦争で愛する者を失った人々に、靈魂の不滅を教え、天国での再会に期待をもたしめた。だが、これに反発して独自の天国観を書き始めたのが Mark Twain で、その抄録が初めて誌上に発表されたのは1907年であった。死んだ Stoomfield 船長の訪れた天国では、wing で飛ばず wishing だけで行きたいところへ行ける。「永遠の休息」はなく、天国の住民はみなよく働く。彼らには潜在する可能性によって資格認定された職業があり、下界の職業とは必ずしも一致しない。というふうに、当為の理想社会を彼は天国に託して描いている。しかし、彼は地獄訪問記は書かなかった。「永遠の刑罰」とやらを考えるだけでも、耐えられなかったのである。

## 総 括

以上、宗教、農業、社会改革、空想、未来の五つに分類して、ユートピアの運動、思想、文学の動向に触れてきたが、全体をとりまとめるために、アメリカのユートピアの特異な体質はどんなものか、テーマ別に考察してみたい。

まず第一に、宗教編は「光」を「西方」に求めたことになるが、「光」を広義に解釈すると、これは他の種類のユートピアにも多少ともあてはまるように思う。反対に、「光」を狭義に解釈して、Puritanism に端を発した protestant のキリスト教に限定しても、本稿で取り扱ってきたユートピアの世界は、キリスト教の伝統を何らかの形で意識していないものは少ない。一般的にみて、アメリカのユートピアはキリスト教倫理に対して、敏感なアレルギー体質をもってはいないだろうか。しかも、それは概して陽性で、ユートピア文学の執筆者は、ともすれば、人間の尊貴性と性善を確信し、人間そのものの改善をさしおいて、ただ制度を改め、環境を整え、生活を高めたら、それでユートピアは到来すると安易に考えやすい。彼らはキリスト教という名の talisman を身につければ、誘惑の魔法をはねのけ、神秘で偉大な力を発揮しうると信じきっていたようだが、「神の国は見られるかたちで来るものでない。・・・神の国は実にあなたがたのただ中にあるのだ」との聖書に記されているキリストの言葉を見落していたのではないか。それにしても「内なる光」とは、Quaker 宗徒も心にくいことを言ったものだ。

次に、アメリカの自然、ひいては国土を、“physical America” と呼ぶのは、相対観念であ

る“spiritual America”を想起せしめ、この両者の結合を暗示している点で面白い表現である。健全な肉体に宿ることによって、健全な精神が生かされることは、ユートピアについても言えないか。良質の適切な土地が与えられたら、ユートピア計画の半分は達成できたようなものだからである。Puritans にとっては Boston, Quaker にとっては Pennsylvania, Mormons にとっては Utah が、精神を宿すべき肉体となった。これらの土地が比較的広汎であったのに比べて、1840年代の Brook Farm は200エーカー、Fruitlands は90エーカーと、規模ははなはだ少さくなっている。農本主義の Crater Colony の開発は、太平洋上の小っぱな孤島での作業にすぎない。Homestead Actによって、ひとりあたり160エーカーの土地が無償で提供されたことは、世紀末近くになって、もはや遠い夢物語と思われた。ユートピア精神は宿るべき肉体である「約束の地」にめぐりあえなくなった。1890年前後のユートピア小説の舞台が、アメリカを遠く離れた架空の大陸か、アフリカの山奥か、約百十年後の新Boston にとんだことは、ゆえのないことではない。

第三に問題になるのは、人間に男女の別があることが、ユートピア建設に支障とならないか、ということである。男女のあるところ、愛欲のもつれが避けられないがために、ギリシア、ローマの古代から、世に小説やドラマの種は尽きないのである。神はAdamに続いてEve を作ったが、これが原罪の発生を促し、彼らをEden に住めなくした。そのEdenを地上に回復しようとの試みに、そのことが暗影を投げかけはしないかと、大部分の指導者が不安にならなかったのは不思議である。恋愛や嫉妬や三角関係などは、Hawthorne が大胆に*The Blithedale Romance* で書いた以外は書く人なく、おおよそ起こらないことになっている。夫婦関係で変っているのはMormon 教徒の一夫多妻制と、Typee族の一妻多夫制だが、いずれも表向きは円満に行なわれたらしい。Shaker 教徒その他、信仰の妨げになるとの理由で結婚を厳禁した向きもあるが、A.B.Alcott はShakers の「家族」にはいるか、妻と4人の娘の家族のなかに止まるかの二者択一を迫られたとき、後者をとった。なお、どのユートピアも男女平等の金看板を掲げているが、それは可能だろうか。以上見てきたかぎりでは、実際は男性は積極的、女性は消極的と思える。これは、心理的な意味においてであるが、女尊男卑の国と称せられるアメリカを、裏返したものではないだろうか。

次に、アメリカの貨幣に示されているように、アメリカはIn God we trustのキリスト教国であるが、それとともにIn gold we trustの傾向は深刻である。ユートピアの夢想家たちはほとんど金銭をすべての悪の根源として排撃しようと努めた。Donnelly が予言した1988年の人類の大悲劇が、もしかすると起こるかもしれぬと憂えさせる兆候は、A.J.Toynbee が指摘しているとおり、アメリカが世界一の富裕国にのし上がり、かつてのような「世界の革命運動の鼓吹者」でなくなったことにある。アメリカは反共主義に徹して自己保全に走り、地球市民に一視同



仁の態度で接する神の理想から遠く離れているという意味のことを、Toynbee は述べている。そしてすべては、異常な金持になった報いだ、と彼は見る。

ここで、アメリカのユートピアの種類を大きく三つにわけて考えてみよう。第一はどこかに現存していて、そこを訪ねる形をとるもの、第二は、同志の仲間が協力して、新しい土地に彼らの理想郷を開発するもの、第三は、作者が空想で描いてみせるもの。アメリカの場合、第二がもっとも多く、第一、第三も煎じつめると、第二の要素が含まれていることを発見する。アメリカの体質には、働いて獲得するユートピアがよく合うが、そのとき一きわ目立つのは指導者格の人物像で、事の成否は彼らの人間としてのりっぱさに比例することが多い。

ユートピア文学にはいわゆる第一流の作品がない、と言われる。それは、作品の書かれた動機、書く作者の文学的未熟さ、たとえ未熟でなくても、ユートピア文学を書く場合、力を抜く、と言った作者側の問題でもあるが、美德の権化のような人物が、作者のあやつるロボットのように現われ、一向トラブルが起こらぬことになっているのが、主な理由ではないか。ユートピア文学は概して、原罪を認めず、予定説に反対するアイルランド出身の神学者Pelagiusの「はるかな高弟たち」の著作で、明るく楽しい、全然かげりが見られない。しかし、ユートピア文学が高度の芸術性を欠いているからと言って、これを蔑視するのはあたらない。むしろそれは、聖書、論語、Upanishadらの流れを汲む奥義書的一种とみなすべきであろう。人類の抱く最高至純の理想の姿がそこに示されているからである。と言って、ユートピア文学にApollo的な鹿爪らしさのみを求めてはならない。目に見えぬ酒に酔うDionysus的饗宴のエネルギー発散の面もあることは、Whitmanの“Song of the Open Road”によって知られるだろう。

ユートピア文学にはその性質上、宗教書によくみかけるparableのような比喻談が織り込まれている。Bellamyの描くユートピアの30万人をおおう大きな傘のたとは適例であるが、この傘の正体いかんで、思いがけない不幸が訪ずれないともかぎらぬ。Mark Twainの天国では、wishingで自由に飛べる便利さはあるが、飛んで来られる立場になると、迷惑至極なことが多いだろう。最近の科学技術のすばらしい進歩にも、大きな傘やwishing飛行と同様な、悲観的な見通しの半面がある。ロシアの哲学者Nicholas Berdiaeffの言うように、ユートピアは実現されるであろうが、案外、知識人がそこから脱け出したくなるような新時代が始まりつつあるのかもしれない。

## 論文審査結果の要旨

本論文はヨーロッパ人によるアメリカ植民の初期より19世紀末に至るまでのアメリカのユートピア思想をあとづけ、特にそれが文学にどのような表われ方をするかを考察しようとしたもの

である。

まず序論においては、ユートピア思想とは夢想的な現状改革の思想であると規定し、Moreの*Utopia*, Baconの*New Atlantis*より筆をおこし、これらの著作がひきおこした理想社会への夢と新世界へのあこがれを取りあげる。そしてヨーロッパ人による植民以来19世紀末までには特にユートピア思想の高まった時期が3回あったと論じてこれらを概説する。それは(1)植民地時代のアメリカ大陸そのものが一つのユートピア視された時期、(2)19世紀の半ば西進運動が盛んであった時期、(3)19世紀最後の数十年間である。これらについてその思想的、経済的背景を叙述しつつ、19世紀末における逆ユートピア文学の出現にまで至る全編の概説を行う。以下の各章ではアメリカにおけるユートピア思想の基礎となった動機を主題別に分類し、それぞれに章を割り当てて論ずる。

第一章は宗教を根底にもつユートピア思想とその文学における表現を扱う。まず植民時代においてはアメリカ大陸そのものがユートピアと見なされていた面があったことを指摘し、そこには宗教的動機が顕著であるとして、各コロニーにおける差異に注目しつつ、それらの歴史的発展を記述する。北部における初期の植民時代の人々の心情と生活をLongfellowやHawthorneなどの作品にさぐり、宗教的ユートピア建設の夢も18世紀の最初の25年間に敗北する経緯を説明しつつ、ピューリタニズムの伝統のまさに消えようとする時期の作品としてSantayanaの*The Last Puritan*をとりあげる。

ついで中部沿岸地方におけるクエーカー教徒が清教徒に迫害される状況をのべ、またWilliam Pennの開拓事業とクエーカー派の伸長を叙述しつつ、これらの歴史的事実がLongfellowやHawthorne, John Woolmanなどの諸作品にどのように表現されているかを考察する。特にモルモン教徒の西進と彼らへの迫害、および彼らの理想郷建設の事業とその破れていく過程をV.Fisherの歴史小説*The Children of God*を参照しつつ論述する。

第二章は農業の進展という見地から本問題を扱う。16世紀末から植民された南部が18世紀に至って農業経済の黄金時代と言われるまでの経過を説明し、Crèvecoeurの書簡などの外には農民文学の少ないことを指摘する。しかし1760年代より西進の気運が高まってくるとともに、西部の未来を望む文学が出現するが、筆者はFreneau, Bryantなどの詩人RöilvaagやW.Gatherの小説など、それぞれの特徴を識別しつつ農地につながるアメリカのユートピア思想の諸特質を論述する。そして西部開拓の夢も行きつまって後、資本主義的土地経営者が生み出す悲劇をF.NorrisやSteinbeckの文学において見出すと論ずる。

第三章は理想的共同体の創造という面から見たユートピア思想とその文学的表現とを扱う。ここでは工業文明の成長とその弊害の増大とともに起った理想社会建設の夢が取りあげられ、その二つの柱はFourier、R.Owenによって代表される社会思想的面とEmersonやThoreauによって代表される哲学的面とであると論ずる。特にHawthorneの*The Blithedale Romance*がはじめ理想主義的情熱を以て始められながら終りには陳腐な通俗小説に墮した成行をユートピア形成の挫折の経過と関連せしめて論述している。

第四章は空想的ユートピアの設定と文学とのかかわり合いを論ずる。G.RipleyのBrook Farmの設立にも多分のロマン主義の影響があったが、美の追求の中に一つのユートピア的世界をかいま見ようとする点Poeもこの系列に入ると述べ、以下主としてCooperの*Crater*とMelvilleの*Typee*によって代表される空想的ユートピアの二つのタイプをアメリカの国民精神と歴史的現実とに関連せしめつつ論じ、Typee 的なタイプのユートピアが真にアメリカ的なものであろうと結論する。

第五章では、1884年以後逃避的に未来を望むユートピアが特に流行するに至った現象は、資本主義的社会の不幸と不満や工業化の進行に基づくものとして、当時の社会状況を説明し、これらのユートピア文学の代表作家としてE.BellamyとW.D.Howellsとを特に考察する。更に同じ状況より*Caesar's Column*のような逆ユートピア的文学の出現した理由を説明する。この中にあって南北戦争のもたらした物心の荒廃に直面して、宗教的発想から生れたユートピア文学も生じ、またこれに反発するMark Twainなどの小説が出現した事情を説明し二つのユートピア観を比較する。

終章はこれまでの諸章の総括であり、補足である。まずアメリカのユートピア思想にみられる特色をまとめて(1)キリスト教思想とどこかでかかわり合っていること、(2)地理的条件の変化とユートピア思想の変化との間に相関関係があること、(3)性と結婚制度については論ぜられることが少ないこと、(4)金銭を悪とする観念について、の四項目にまとめて考察する。ついで本論で扱ったユートピアのあり方を、(a)現在存在しているものと考えられたユートピア、(b)今から建設すべきユートピア、(c)全く空想的ユートピア、の三種に類別して考察し、アメリカにおいては(b)のタイプが最も優勢であることを指摘し、これをアメリカ的性格と結びつけて論述する。最後にユートピア文学一般についての諸問題点を考察して本論文は終わっている。

本論文は、第一章以下において主題別に論述をすすめるという方法を採用しているが、この方法は問題の所在を明らかにするという利点はあっても、多少の重複と叙述の流れの中断という欠

点を伴うものであり、事実本論文にもこの欠陥はわずかながら現れている。

しかし三世紀にわたる広般な資料や史実をよく巧みに駆使してアメリカ文化の一面をまとめあげたのは本論文の筆者の学識と洞察力とによるものと思われる。アメリカ文化及びアメリカ文学の研究に貢献することは疑いのない事実である。

なお上記委員は、提出者が大学院博士課程修了者と同等以上の学力を有することを確認した。

以上の理由をもって、本論文の提出者は、文学博士の学位を授与されるに充分の資格をもつものと認められる。